

# 銭形平次捕物控

平次屠蘇機嫌

野村胡堂

青空文庫



## 一

元日の昼下り、八丁堀町御組屋敷の年始廻りをした銭形平次と子分の八五郎は、海賊かいぞく橋ばしを渡つて、青物町へ入ろうというところでヒョイと立止りました。

「八、目出度いな」

「へエ——」

ガラツ八は眼をパチパチさせます。正月の元日が今はじめて解つたはずもなく、天気は朝つからの日本晴れだし、今さら親分に目出度がられるわけではないような気がしたのです。「旦那方の前めえじや、呑んだ酒も身につかぬえ。ちようど腹具合も北山だろう、一杯身につけようじゃないか」

平次はこんな事を言つて、ヒョイと顎あごをしゃくりました。なるほど、その顎の向つた方角、活鯛いけだい屋敷の前に、いつの間に来たか、洒落しやれた料理屋が一軒、大門松を押し立てて、年始廻りの中ちゆうじき食で賑わっていたのです。

「へエ——、本当ですか、親分」

ガラツ八の八五郎は、存分に鼻の下を長くしました。ツイぞこんな事を言ったことのない親分の平次が、与力笹野新三郎の役宅で、屠蘇とそを祝ったばかりの帰り途に、一杯呑み直そうという量見が解りません。

「本当ですかは御挨拶だね。後で割前を出せなんてケチな事を言う氣遣いはねえ。サア、真つ直ぐに乗り込みな」

そう言う平次、料理屋の前へ来ると、フラリとよろけました。組屋敷で軒並な嘗めた屠蘇が、今になって一時に発したのでしよう。

「親分、あぶないじやありませんか」

「何を言やがる。危ねえのは手前てまえの顎だ、片付けておかねえと、俺の鬚まげ節ぶしに引つ掛るじやないか」

「冗談でしょう、親分」

二人は黒板塀めくを繞らした、相当の構えの門へ繋がって入って行きました。

真新しい看板に『さざなみ』と書き、浅黄あさぎの暖簾のれんに鎌輪奴かまわぬと染め出した入口、ヒヨイと見ると、頭の上の大輪飾おおわかざりが、どう間違えたか裏返しに掛けてあるではありませんか。

「こいつは洒落しやているぜ、——正月が裏を返しや盆になるとよ。ハツハツ、ハツハツ、だ

が、世間付き合いが悪いようだから、ちよいと直してやろう」

平次は店の中から空あきだる樽を一挺持出して、それを踏台に、輪飾りを直してやりました。

「入らつしやい、毎度有難う存じます」

「これは親分さん方、明けましてお目出度うございます。大層御機嫌で、へッ、へッ」

帳場にいた番頭と若い衆、掛け合いで滑らかなお世辞を浴びせます。

「何を言やがる、身銭を切つた酒じゃねえ、お役所のお屠蘇で御機嫌になれるかッてんだ」

「へッ、御冗談」

平次は無駄を言いながら、フラリフラリと二階へ――

「お座敷はこちらでございます。二階は混み合いますから」

小女が座布団を温めながら言うのです。

「混み合つた方が正月らしくていいよ。大丈夫だ、人見知りするような育ちじゃねえ。――

――もつともこの野郎は酔が廻ると噛み付くかも知れないよ」

平次は後から登つて来るガラツ八の鼻のあたりを指さすのでした。

小女は苦にんがりともせずにに跟ついて来ました。二階の客は四組十人ばかり、二た間の隅々に陣取つて正月気分もなく静かに呑んでおります。

「そこじや曝し物みたいだ。通りの見える所にしてくれ」

部屋の真ん中に拵えた席を、平次は自分で表の障子の側に移し、ガラツ八と差し向いで、威勢よく盃を挙げたものです。

「大層な景気ですな、親分」

面喰らったのはガラツ八でした。平次のはしやぎようも尋常ではありませんが、それよりも胆を冷したのは、日頃堅いで通った平次の、この日の鮮やかな呑みっ振りです。

「心配するなよ。金は小判というものをフンダンに持っているんだ。なア八、俺もこの稼業には飽々してしまつたから、今年は一つ商売替をしようと思うがどうだ」

「冗談で——親分」

「冗談や洒落で、元日早々こんな事が言えるものか。大真面目の涙の出るほど真剣な話さ。ね、八、江戸中で一番儲かる仕事は一体なんだろう。——相談に乗ってくれ」

そう言ううちにも、平次は引つ切りなしに盃をあけました。見る見る膳の上に林立する徳利の数、ガラツ八の八五郎は薄寒い心持でそれを眺めております。

「儲かる事なんか、あつしがそんな事を知っているわけがないじゃありませんか」

「なるほどね。知っていいや、自分で儲けて、この俺に達引いてくれるか。——有難いね、

八、手前の気つぶに惚れたよ」

「……………」

ガラツ八は閉口してぼんのくぼを撫なでました。

「——もつとも、手前の気つぶに惚れたのは俺ばかりじゃねえ。横町の煮売屋のお勘かん子こがそう言ったぜ。——お願いだから親分さん、八さんに添そわして下さいいっ——てよ」

「親分」

「悪くない娘だぜ。少し、唐からうす白を踏むが、大したきりようさ。どっちを見ているか、ちよつと見当の付かない眼玉の配りが気に入ったよ。それに、あの娘はときどき垂れ流すんだってね、とんだ洒落た隠し芸じゃないか」

「止して下さいよ、親分」

「首くくでも縊くると気の毒だから、なんとか恰好をつけておやりよ、畜生ちくしようめ奴」

「親分」

ガラツ八はこんなに驚いたことはありません。銭形平次は際限もなく浴びせながら、滅茶滅茶に饒舌しゃべり捲まくつて二階中の客を沈黙させてしまいました。

四組のお客は、それにしてもなんとというおとなしいことでしょう。そのころ流行はやった、

客同士の盃のやりとりもなく、地味に呑んで、地味に食う人ばかり。そのくせ、勘定が済んでも容易に立とうとする者はなく、後から後からと来る客が立て込んで、いつの間やら、四組が六組になり、八組になり、八畳と四畳半の二た間は、小女が食物を運ぶ道を開けるのが精いっぱいです。

「なあ、八、本当のところ江戸中で一番儲かる仕事を教えてくれ、頼むぜ」

平次はなおも執拗にガラツ八を追及します。

「泥棒でもするんですね、親分」

ガラツ八は少し捨鉢になりました。

「なんだとこの野郎ッ」

平次は何に腹を立てたか、いきなり起上がってガラツ八に掴みかかりましたが、さんざん呑んだ足許が狂って、見事膳を蹴上げると、障子を一枚背負ったまま、縁側へ転げ出したのです。

「親分、危ないじゃありませんか」

飛び付くように抱き起したガラツ八、これはあまり酔っていない上、どんなに罵倒されても、親分の平次に向って腹を立てるような男ではありません。



「ああ酔った。——俺は眠いよ、ここで一と寝入りして帰るから、そつとしておいてくれ」  
障子の上に半分のしかかったまま、平次は本当に眼をつぶるのです。

「親分、——さア、帰りましょう。寝たきや、家に帰ってからにしようじやありませんか」  
「なにを。女房の面を見ると、とたんに眼がさめる俺だ。お願いだから、ここで——」

「親分、お願いだから帰りましょう、さア」

ガラツ八は手を取つて引起します。

「よし、それじや素直に帰る。手前<sup>てめえ</sup>これで、勘定を払つてくれ。言うまでもねえが、今日は元日だよ、八、勘定こつきりなんてみつともねえことをするな」

「心得てますよ、親分。——小判を一枚ずつもやりやいいんでしよう」

「大きな事を言やがる」

ガラツ八は平次を宥<sup>なだ</sup>めながら、財布から小粒を出して勘定をすませ、板前と小女に、機<sup>はす</sup>み過ぎない程度のお年玉をやりました。

「あ、親分、そんな事は、婢<sup>おんな</sup>にやらせておけばいいのに——危ないなアどうも」

八五郎もハツとしました。平次は覚<sup>おぼつか</sup>束<sup>ふみ</sup>ない足を踏締めて、自分の外した障子を一生懸命元の敷居へはめ込んでいます。

「放っておけ。俺が外した障子だ、俺が直すに何が危ないものか。おや、裏返しだぜ。骨が外へ向いてけつかる、どっこいしょ」

平次はまだ障子と角力すもうを取っております。

## 二

八五郎は平次を引つ担ぐようにして、どうやらこうやら帳場まで降りて来ました。

帳場に坐つて居るのは、中年の番頭が一人。

「お帰りで？ 親分さん、毎度有難う存じます。またどうぞお近いうちに」

「とんだ騒がせたね、済まねえ」

平次はフラフラと首をしやくつて、草履ぞうりを突っかけます。鼻緒はなおがなかなか足の指にはまりません。

「つまらないものでございますが、どうぞお手拭てぬぐいきになすって下さいまし」

番頭は帳場の側へ二た山に積んだ、お年玉の手拭てぬぐいのうちから白地のを二本取つて、平次と八五郎に渡しました。

「有難てえ、遠慮なしに貰って行くぜ。ところで番頭さん、俺はこう見えても大の親孝行者なんだ」

「へエ、へエ、結構なことだ——」

「お袋は取って六十七だが、白地の手拭は汚れっぽいからと言って、あさぎ浅黄の手拭でなきや、どうしても使わねえ」

「……………」

「お安い御用だ。ひよいと一本だけ、その浅黄の方と換えてくんない」

平次は貰った手拭を下へ置いて、番頭の方へ手を出しました。

「御冗談で、——親分さん。その白地の方が品がしなぐつと良くなりますよ。浅黄は染も地も悪くなりますが」

「その地の悪いのが好きなんだ。どうも手拭の良いのは、顔の皮を剥いて、始末にいけねえ」

「とんでもない。これは出前の註文に入らっしゃる御近所の衆や、お使いの方に差上げる分で——」

「そんな事を言わずに、頼むから一本」

平次は根氣よく絡み付きます。生なまよ酔らしい執拗しやくごうさに、番頭はすっかり持て余しました  
が、小腹が立ったものとみえて、手拭の山を後ろに庇かばうように、頑として平次の望みを断  
わり続けるのでした。

「親分、いい加減にして帰りましょう。浅黄の手拭が要るならその辺で二三反買つて行こ  
うじゃありませんか」

見兼ねてガラツ八が口を出します。

「なんだ、人の財布を預かっていると思つて、いやに大束おおたばを決めるじゃないか——まあ  
いいや、手拭一と筋で喧嘩にもなるめえ、素直に帰ろう」

「危ない、そこは敷居ですよ、親分」

あんよは上手——の形で、ようやく平次を外に伴れ出したガラツ八、日本橋を越してホ  
ツとしました。

「八」

「へエ——」

「誰も見ぢやいないな」

「へエ——」

神田が近くなると、平次の態度は、俄然変つたのです。

「浅黄の手拭を出しな」

「へエ——」

「番頭と揉んでいるうちに、手前懐へ一本忍ばせたらう。——あんな隠し芸があるとは知らなかつたよ」

平次はヒョイと手を出しました。しゃんとした足取り、顔の色も、身体の安定も、日頃の平次と少しも変りません。

「浅黄の手拭に曰くがあるだろうと思つて、一本持つて来ましたよ。それでもなきや、親分はいつまで番頭とやり合っているか解らねえ」

ガラツ八は懐から浅黄の手拭をひと筋、のし紙に包んだままのを出しました。

「手前の指先の働を見届けたから、俺は番頭に絡むのを切上げたんだ。大した腕だぜ八、岡つ引よりあの方が柄に合やしないか」

「冗談でしょう。——ところで、親分は酔っちゃいなかったんで？」

ガラツ八は先刻から、打つて変つた平次の様子が不思議でなりません。

「本当に酒を呑んだのは、吸物碗と盃洗と、吐月峰さ」

「へエ——」

「俺は三猪口みちよことは呑んじやいねえ」

「すると？」

「間抜けだなア。——あの家を、不思議だとは思わなかったのか、手前は？」

「へエ——」

ガラツ八にはまだ解りません。

「冒頭はなから、話そう。——第一番に、入口の輪飾りが引っくり返って、裏の方を見せてい

たろう」

「へエ——」

「縁喜物えんぎものを裏返しに掛けるあわて者がどこの世界にあるものか——空樽を踏台にして、

やっと手の届くところだから、子供のしたことじゃねえ」

「なるほどね」

ガラツ八は長い顎を撫でました。

「それだけなら物の間違いとも思うが、——表二階の障子が一枚、裏返しになっていたのに気が付いたか」

「そう言えば、親分の倒した障子を、そのまま敷居へはめたら、骨の方が外を向いてましたね」

ガラツ八は、あの時の平次の酔態すいたいをはつきり思い出しました。

「客商売の家が、元日早々、障子を裏返しにしておくという法はないよ」

「フーム」

ガラツ八は鼻の穴をふくらませました。平次の話が次第に重大さを加えるので、そつと後ろを振り返りましたが、ここへ来るともう元日の街も思いのほか淋しく、廻礼あさがみの麻あさがみ袴しもや、供の萌黄もえぎの風呂敷が、チラリホラリと通るだけ、両側の店も全く締めて、飾り松だけが、青々と町の風情を添えております。

「たつたそれだけで、俺は素通りが出来なくなつた。屠蘇機嫌といった顔で、輪飾りを引つくり返したり、障子をわざと外して、裏表を直したり、とんだ生酔なまよいの芝居をしたが、

——勘定を済まして、外へ出て振り返ると——」

「……………」

「輪飾りはやはり裏返しになっていたし、二階の障子も、真ん中の一枚は、骨が外へ向いていたよ」

「へエ——」

「手前はそこまで気が付かなかつたろう」

「恐れ入った。親分、もう一度引返して様子を見ましようか」

「馬鹿、この上相手に要心させてたまるものか。そうでなくてさえ、俺を平次と見破つたんじゃないかと、大ビクビクものだったぜ」

それにしても、『さぎなみ』の謎は解けそうもありません。

「なんだつてそんな事をしたんでしようね、親分」

「それが解らねえ」

平次は往來の真ん中で腕組をしてしまいました。

「輪飾りを引っくり返したり、障子を裏返しにすると、何かのまじない禁呪になるでしょうか。

今年はやりやまいは流行病がありそうだからとか何とか」

「そんな馬鹿なことがあるものか。その上、あんなに立て混んでいる客が、元日だということに、少しおとなし過ぎたよ」

「……………」

「場所は海賊橋だ。——街を通る人から、たった一目で見える輪飾りと障子に細工があ



つたんだぜ——」

二人の足は、いつの間にやら、平次の家へ——路地を入れておりました。

「親分、その手拭に何かありやしませんか」

「それだよ、——ともかく、お屋敷へ帰けえつてからとしようぜ」

「へッ、北の方お待兼ねと来やがる」

「殴るよ、この野郎」

噂をされる女房のお静は、この時まだ若くも美しくもあつたのです。

### 三

「どうだい八、番頭が物惜しみをしただけに、手が混んでいるじゃないか」

平次は浅黄の手拭を畳の上に拡げました。

「なるほどね、十二支と江戸名所尽しだ」

手拭は一面の模様で、細かく十二に割つた区画の中に、十二支の動物や、塔や、橋や、鳥居や、人物が、統一も順序もなく並べてあるのです。

「江戸名所に、鍋鉸なべづるや賽さいころはないぜ」

それ以上は二人にも判りません。とにかく、最初のひと区画は、塔と飛んでいる動物と、橋の欄らんかん干があるだけ。

「こいつは親分、両国橋から見た浅草の五重の塔じやありませんか」

「飛んでいるのは」

「鳶とびか何かで」

「かもめ鳴なら判っているが、——恐ろしく腰の細い、足の長い鳶じやないか。まるで蜂か蚊だぜ」

「……………」

「とにかく、この手拭を持って行って、どこで染めたか突き止めてくれ。端はじつこに印があるから、商売人が見たら判るだろう。紺屋あつらえぬしが判ったら、誂主を訊くんだぜ」

「へエ」

「それから、正月早々気の毒だが、しばらくの間、あの『さざなみ』を見張っていて貰いたいな。手が足りなかつたら、下っ引を狩り出しても構わねえ」

「そんな大物でしょうか、親分」

「博奕ばくち宿か、大名の洒落か判らないが、とにかく、お膝元に不似合なものらしいよ」  
二人はそれつきり別れました。

平次はそれからすつかり寝正月をして、三日の朝不精床を這い出すと、

「お早う」

ガラツ八の八五郎が忠実まめな顔を持つて来たのでした。

「なんだい、八、年始はもう済んだはずだぜ」

平次は脚楊枝くわえようじで淡い陽の中から声をかけます。

「あれツ、忘れちゃ情けないね。親分、海賊橋の輪飾り」

「あ、そんな事もあつたようだね。三日二た晩寝通してみるがいい。御用のことはともかく、女房の面も忘れるよ」

平次はそんな事を言いながら、せつせと遅い朝の支度をしている、お静の素知らぬ顔をチラリと見やります。

「ハッ、惚気のろけを聴きに来たんじやねえ。手拭の詛主は判りましたぜ、親分」

「誰だ？」

「さざなみの番頭で」

「馬鹿野郎、『さざなみ』のお年玉を、『さざなみ』の番頭が逃げるに、何の不思議があるんだ。もう少し、詮索せんさくをしてみろ」

「しましたよ、親分、驚いちゃいけませんよ」

「脅かすなよ」

「こいつを驚かかった日にや木戸は要らねえ。『さざなみ』は昨日のうちに店を畳みましたぜ」

「なんだと」

「大晦日に店を開いて、正月の二日に店仕舞をしたと聴いたら、親分だって驚くでしょう」

「よし、すぐ行ってみよう。大家はどこだ」

「裏の倉賀屋——質屋が家主で」

それを半分訊いて、平次はもう出かける支度です。

「あれ、お前さん、まだ朝飯も、済まないじゃありませんか」

驚いたのはお静でした。

「お前一人で済ましておけ。——羽織はどこだ、——紙入と手拭は？」

二人は呆れるお静を後に、真ほんに鳥のように飛んで行ってしまいました。

## 四

海賊橋へ行つてみると『さぎなみ』は店を締めて、近所で訊いても、どこへ引越したとも解りません。『さぎなみ』の真裏、庭続きの質屋——倉賀屋——へ行つて訊くと、

「どうも驚きましたよ。暮の二十五日に来て、正月早々店を開きたいからと、一兩二分で貸しました——へエ、店賃は確かに一と月分頂戴しましたが、店を開いて、たった一日で、どうも商売は思わしくないから、故郷の府中へ帰ると言い出すじゃございませんか、あんな店子たなごは見た事ありません」

主人の総七は、五十恰好のよく練れた人相を、解き難い謎に曇らせませす。

「借り手はどんな人間で？」

「主人あるじは顔を見せませせん。番頭は四十がらみの、世辞せじのいい男で」

それなら平次もよく知っております。

「雇人は？」

「下足が一人、板前が二人、下女が二人、それにお座敷女中が三人ぐらいいいたようでご

「ございます」

「あれほどの店を貸したんだから、証人があるだろう」

「それが、その、江戸へ出たばかりで、知合がないからというお話で、そのかわり敷金を半年分九両入れました。——もつともそれは昨夜お返し申しましたが」

「それにしちやお年玉の手拭を逃えたのは可笑おかしいな。暮の二十五日じゃ間にあわねえはずだ」

「へーエ？」

独り言ともなく、言った平次の言葉、主人の総七も何やらピンと来た様子です。

「なんか書いたものはないだろうか、請取とか、名札とか？」

「生あいにく憎にくなんにもございません」

これでは取付く島もありません。平次もしばらくは、煙草の烟けむりを輪わに吹くばかり。

「それじゃ、あの店を私に貸してはくれまいか」

平次は大変なことを言い出しました。

「それはもう、親分さんの御用とおっしゃれば、決して否応は申しません。が、生憎『さざなみ』が、立退くと入れ違いに、借手が付いてしまいました」

「はて？ どの何という人だえ」

「何でも、古道具の糶屋せりやさんだそうで、五日にはきつと越して来るからと、手金まで置いて行きました」

「ちよいと、その手金を見せて貰おうか」

「へエ——」

主人は帳場格子の中で、何やらガチャガチャさせると、四両二分の金を持って来て、平次の前に並べます。

「この金に目印でもあるのかい」

「何にもございません」

「それじゃ、どうして金箱の中から選より出したんだ」

「へエ——」

こうなると、少しも要領を得ません。

「五日に越して来るなら、今日は三日だから、四日一日は空いているだろう」

「へエ——」

「その空いてる四日一日だけ貸して貰おうか。五日の朝のうちには、綺麗に引払って行く

から」

「へエ——」

倉賀屋総七は、あまり気の進まない様子ですが、顔の良い御用聞の申出を断わるほどの勇気もなかったのです。

「店賃は一両二分、一と月分に負けて貰おうか。——もつとくれと言われても、それで正月の小遣い総仕舞だ」

平次はそんな事を言つて、一両二分の金を取냅니다。

「それには及びませんよ、親分さん。たった一日ぐらいのことなら、どうぞ御自由にお使い下すつて」

「いや、借りた家の店賃は、やはり払わないと気が済まねえ。そのかわり一筆請取を書いて貰おうか」

「それじゃ、しばらくお預り申します」

平次の引きそうもない様子を見ると、主人の総七は渋々ながら一筆請取を書いて出しました。



## 五

「八、いよいよ商売替だよ」

「へエ——」

「気の無い返事をするなよ、なんとか景気をつけてくれ」

「何をやらかすんで」

倉賀屋の<sup>かえり</sup>帰途、平次はこんな事を言い出すのです。

「判っているじゃないか、『さざなみ』の後を借りたんだ。——当節はなんと云つても儲けの早いのは食物屋さ」

「驚いたなア」

「驚くことなんかあるものか。手前<sup>てめえ</sup>庖<sup>ほう</sup>丁<sup>ちよう</sup>の心得はあるかい」

「そんなものはありやしません。十手小太刀の心得なら少しはあるが——」

「生意気なことを言うな。どうせたつた一日だ。俺は帳場へ坐るから、手前は板前よ。お静は下女でお品さんに手伝つて貰つて、これはお座敷女中」

「大変なことになつたね、親分」

ガラツ八の驚き呆れる間に、平次は着々とその支度を整えました。もつともガラツ八の板前では納まりません。知合の料理屋から、手の空いている限りの人数をカキ集め、座布団も、火鉢も、膳椀も一日のうちに運び入れて、正月の四日には、もう夜が明けると一緒に店を開いたのです。

「親分、とうとう真物ほんものですね」

「ざつとこんなものだよ、八、表を見てくれ」

平次に言われて表に廻った八五郎。

「あッ」

さすがに驚きの声をあげました。

「どうだ八」

「あの通りだ、輪飾りも、——二階の障子も」

輪飾りを裏返しに、二階の障子の骨はこつちを向いているのです。

「家主さんおぢやへ行つて、火鉢を二つ三つと、帳場で使う当り箱と、掛物を一幅借りて来い——何だつて構わないとも、山水でも花鳥でも、お仏様でも、——相手は質屋だ。それぐらいの品はないはずはないよ」

「応ッ」

こうなるとガラッ八も一生懸命でした。

まだ廻礼のある時分で、巳刻よつ（十時）頃からボツボツ客が来ますが、本職の板前や女中が入っているのです、帳場の平次少しも驚きません。

昼頃になると、家主の主人総七が、ブラリと様子を見に来ました。

「親分さん、商売はどんな様子で？」

「お蔭様で大繁昌です。いよいよ私も商売替をして、ここへ根を生やしましょうか」

「とんでもない」

平次のニコニコした顔を、およそ、見当のはずれた様子で眺めながら、倉賀屋の主人は帰って行きました。

「八」

「へエ——」

「何人来ている」

「六人ばかり、皆んなこの居廻りの下つ引ですよ」

「それでいい、江戸橋と、日本橋の御高札場と、万よろずちよう町と、青物町と、二丁目の河岸つ

端へ一人ずつ張り込ませてくれ。立話をする奴か、往来の人へ合図をする者があつたら、構わねえから、邪魔をするんだ。時と場合じゃ引つ括つてもいい」

「へエ」

「これは大きな声じや言えねえが、倉賀屋の丁稚小僧が外へ出たら、一々後を跟けるんだぜ」

「へエ——」

八五郎を出してやると、平次はまた帳場に脂下がりします。

新店のせいとか、客は一向来ません。——いや、新店でも元の『さぎなみ』はあんなに客が立て混んだのです。今度は一体何としたことでしょう。

「入らつしやい」

「許せよ」

ズイと入つて来たのは、虚無僧が二人。

「どうぞお通りを」

「遅れて心配いたしました。元日という約束であつたが、箱根の関所で手間取つて、今日ようやく江戸へ入つた始末じや」

何が何やら解りません。

「御苦労様で——さア、どうぞ二階へ、お通り下さいまし」

平次は一生懸命でした。が、天蓋てんがいの中の顔は、見る工夫もありません。

「手形はこれだ」

「へエ——確かに頂戴いたします」

小さく畳んだ紙片かみきれ、平次は押し戴くように懐中へ入れます。

「許せよ」

二人の虚無僧は天蓋を冠かぶつたまま、静かに階子段はしごだんを踏んで二階へ昇りました。

平次はその後ろ姿を見送つてそつと紙片かみきれを開きました。中には月日と仮名と数字ばかり。

二月十八日 (ウ) 三五八

四月 六日 (サ) 一〇〇

同 二十九日 (カ) 一〇

七月二十八日 (サ) 八

九月十七日 (ス) 六五

十月 七日 (ハ) 六

以上七項が書いてあるのです。

半刻(一時間)ばかりの後、軽い食事を済ました二人の虚無僧は、綺麗に勘定を払って二階から降りて来ました。

「有難う存じます、またどうぞ」

少しギコチないが、精いっぱいの世辞をふり撒く平次に、

「お年玉を貰おうかの」

若い方の虚無僧は手を出したのです。

「……………」

平次はハツとしました。何もかも残るところなく用意を整えた積りでしたが、お年玉の白い手拭と浅黄の手拭だけは、染める暇がなかったのです。

「例年のことだが——」

平次の躊躇ちゆうちよするのを見て、虚無僧の一人は屹きつとなりました。

「お生憎様ですが、元日一日で出払ってしまいました」

「何、出払ってしまった。そんなはずはない。我々をなんと心得て仲間外れにするのだ」  
 「とんでもない——あ、ごさいます。一筋だけ残っております。少し皺くちやになりましたが、これで御勘弁を願います」

平次は元日ここの帳場から、ガラツ八がくすねた浅黄の手拭を懐から出して、折目正しく畳み直し、用意の熨斗紙のしがみに包んで、恐る恐る差出しました。

「よしよし、皺になつても、貰いさえすれば。——それではまた逢おう」  
 「有難うございます。それでは、お静かに」

振り返りもせず立去る二人の虚無僧を見送つて、平次は思わず冷汗を拭きました。

「八、八は居ないか」

「親分」

ノソリと物蔭から出たのはガラツ八です。

「あの二人の虚無僧の後を跟つけてくれ」

「へエ——」

ガラツ八は獵犬のように、尻を七三に引っからげて飛出します。

## 六

二た刻ばかり後、今日一日の店を仕舞い、借りた物は返し、傭<sup>やと</sup>った人には手当をやつて  
いるところへ、ガラツ八の八五郎は濡<sup>ぬ</sup>れ鼠<sup>ずみ</sup>のようになつて飛込んで来ました。

「あッ、ブルブル。あの若い虚無僧の腕には驚きましたよ、親分」

「ちよつかいを出して、大川へでも投<sup>ほう</sup>り込まれたんだろう」

平次は案外驚いた顔もありません。

「ちよつかいなんか出せるものですか。神妙に後を跟<sup>つ</sup>けて行くと、亀<sup>かめいど</sup>戸へ行つて、深川  
へ廻つて、それから永<sup>えいたい</sup>代を渡つてまたこつちへ戻るじやありませんか」

「どんな家を訪ねて廻つたんだ」

「どこへも行きやしません。天神様へお詣りして、落書をひと互<sup>わた</sup>り読んで、矢立を出して  
柵へなんか書いて、八幡様へ行つて同じことをして、それから永代橋の欄干の裏へなんか  
細工をして」

「フーム」



平次の顔は次第に真剣になります。

「立去った後、その欄干の下をヒョイと覗くと、いきなり若い虚無僧が戻って来て、先刻から我々兩名の後を跟けているようだ。不埒千万——だつて言やがる」

「投げられたのか」

「へエ——十手を出す暇もありやしません。いきなり一本背負いっほんぜおいに、欄干を越してドブんとやられたには驚きましたよ」

「危ないね」

「親分の前だが、永代の下の水は、思いのほか塩っぱい」

「馬鹿野郎」

そう言いながらも、寒空にガタガタ顫ふるえている八五郎の着物を脱がせ、皆んなから一枚ずつ剥いで、どうやらこうやら暖めた上、倉賀屋から布団を借出して来て、階子はしごの下の六畳に寝かしました。

「風邪を引きそうだが、親分」

「今熱爛あつかんで一本やるから、それを吞んで寝てしまえ。俺はこれから八丁堀へ行って、明日の朝迎いに来る」

「少し淋しいね、親分」

「何を、子供じゃあるまいし」

平次は多勢の手伝いを皆んな帰した上、八五郎一人を留守番にして、そこから遠くない八丁堀組屋敷へ急ぎました。

与力笹野新三郎に逢って、

「旦那、この日付と数に、お心付きはございませんか」

虚無僧が手形と言つて置いて行つた紙片かみきれを見せました。笹野新三郎しばらく眺めておりました。

「平次、これはどこから手に入れた」

膝の上に置いて容易ならぬ眼を挙げます。

「虚無僧が置いて行きました。もつとも私を仲間と間違えたようです」

「これは大変なものだぞ。——ここじゃ詳しいことは解らない。御数寄屋橋へ行つて、書き役の方に伺つてみるがいい」

「有難うございます、それじゃ」

「待て待て、俺わしも行こう。これは近頃の大捕物になるかも知れない」

笹野新三郎、即刻支度を整え、平次ともども御数寄屋橋内、南奉行所に急ぎました。  
書き役は留守。

思いの外ほか手間取つて、添役に記録を調べさせると、重大事件の輪郭が次第に判つて来ます。

「これは大変でございますよ、笹野様。昨日の二月十八日は、東海道宇津谷峠うつのやとうげで金飛脚が殺され、三百何十両の金が取られております」

「えッ」

「それから四月六日には薩埵さつたとうげで商人あきんどが殺され、路用を奪われましたが、金高はわかりません。その月二十九日には、蒲原かんばらの酒屋に押込が入つて、売溜を奪とつて逃げ、七月二十八日は小夜さよの中山で追剥おいはぎが旅人を脅かし、九月十七日には飛んで鈴鹿峠すずかとうげで大坂の町人夫妻が殺されて大金を取られ、十月七日は、箱根で一人旅の女が身ぐるみ剥がれております」

「それは大変だ」

と笹野新三郎。

「してみると、あの『さざなみ』は泥棒の顔かおつなぎ繋なをする場所だったのですね」

錢形平次はこんな事だろうとは思いましたが、いまさら事件の重大さに驚くばかりです。多分、全国の泥棒どもが年に一度の顔寄せに、お互の功名を誇り合った上、獲物を何かの方法で分配でもするのでしよう。

「平次、しつかりやれ、これは容易ならぬことだぞ」

笹野新三郎は平次の腕に期待をかけます。

## 七

平次は笹野新三郎と打合せて、八丁堀を繰出したのは暁あけの寅刻ななつ（四時）。霜を踏んで倉賀屋から、『さざなみ』の前後を、すつかり取囲ませました。

『さざなみ』に行つて一応ガラツ八の様子を見ようと思いましたが、なまじそんな事をして、曲者に用心させてはと、手先捕方を隙間もなく配置し、ともかく夜の明けるのを待つことにしたのです。

「何と申しても、怪しいのは倉賀屋でございます。自分の持家を寄合に使っているのを、知らないはずはないのに、何かと胡麻ごま化かすことばかり考えているようで、あの総七という

主人は油断がなりません」

平次は倉賀屋へ第一番に疑いをかけた上、手に及ぶかぎりの下っ引を動員して、二人の虚無僧の落着いた先を調べさせました。

「夜が明け切つては、近所の家で驚く。もうよかろう平次」

笹野新三郎は若いだけに功名を急ぎます。

「それッ」

平次の号令につれて、前後左右から倉賀屋の囲みを絞つたのは寅刻半（五時）頃。

「御免よ。板原左仲様御屋敷から来たが、かねて、入質の大小、今日の御登城に御用いになるそうだ。すぐ出して貰いたい」

「板原左仲様——とおっしゃる方は存じませんが」

臆病窓を開けた手代、淡い暁の光の中に立っている、お屋敷者らしい男を、不審そうに見やりました。

「そんな事があるものか、御身分柄内々の質入だ。主人に逢えば判る、潜戸をちよいと開けてくんない」

「へエ——」

手代は争い兼ねて潜戸を開けると、

「御用ッ」

「神妙にせい」

一隊の人数が、礫つぶてのように乱れ入ります。

が、しかしこの襲撃も、とんでもない結果になってしまいました。折角狙って来た倉賀屋あるじの主人総七は奥の部屋で寝たまま刺し殺され、おびただしい金と、番頭の九郎助が行方不明になっていたことが判ただけだったのです。

家捜しをしてみると、蔵の中はお触書にある贓品ぞうひんだらけ。

「やはり、この総七は泥棒の片割れでした。——質屋になって、永いあいだ仲間の盗んだ品さばを捌いたのでしよう」

平次の解ったのは、たったこれだけです。

「番頭は？」

「仲間割れがしたか——主人の総七が裏切る様子でもあったので手を廻したのかも解りません」

「引続いて頼んだ、手を緩めてはならぬ」

与力笹野新三郎は、万事を平次に任せて、朝のうちに引揚げてしまいました。

「ところで、八はどうしているだろう。この騒ぎにも起き出さないのは、よっぽど疲れたのかな」

平次は『さぎなみ』へ行つてみました。手を掛けると、締めたはずの表戸はわけもなく開いて、サツと射込む朝の光の中に、布団で昆布巻こんぶまきにされた上、丁寧に猿轡ざるぐつわまで噛まされたガラツ八が、階子はしごの下まで転げて来て、情けない眼を光らしているではありませんか。

「馬鹿野郎、なんてエギまだ、一人前の岡っ引が——」

平次は大叱言おおごことを浴びせながらも、表戸をピタリと締めて、手早く八五郎の縄と猿轡を解いてやります。この浅ましい姿を人に見せなくなかったのです。

## 八

しかしこの失敗は事件のクライマックスでした。萎れ返るガラツ八を連れて神田の家へ引揚げて来た平次は、それから四五日、物も言わずに一と間に籠こもってしまつたのです。

「親分は？」

お勝手口から臆病らしく顔を出した八五郎が、おやゆび 拇指をそつとお静に見せたのは、十日の昼過ぎ。

「相変らずよ。腕組みをして、唸つてばかりいるんですもの、——何とかして下さいな、八五郎さん」

恋女房のお静も、すっかり持て余し気味です。

「大丈夫ですか、いきなり怒鳴りやしませんか」

八五郎はあの失敗以来、すっかり御無沙汰して、この家の敷居がまた 跨ぎ切れないような心持だったので。

「八か、大丈夫だ。噛付きはしないから、入って来い」

奥から思ったよりも晴々しい平次の声。

「へエ——」

ガラツ八は恐る恐る小腰をかが 屈めて、まげぶし 鬚節ばかり障子の中へ入れました。

「なんて恰好だい。まア入れ、八」

「へエ——、もう怒つちやいませんか、親分」



「縮尻しくじりはお互だよ。——ところで八、今日は何日だっけ？」

「正月の十日ですよ、早いもので」

「年寄り染みた事を言うな。——その十日に来たのはお前の運がなかったんだ、これを見てくれ」

「へエ——」

ガラツ八は恐る恐る滑り込みました。平次は畳の上へ置いた半紙へ、変哲なものを書いて一生懸命それと睨めっこをしているのです。

「これは何だと思う、八」

「橋の欄干じゃありませんか。——あッ、あのお年玉の手拭の模様を書いたんで？ 親分ですかえ、これは、うめえもんだね」

「お世辞を言っちゃいけねえ。——手拭は虚無僧にやってしまったが、心覚えがあるから、あの模様の一番初めのを書いてみたんだ」

「へエ——」

「ところで。橋の欄干としてどこにこんな橋があるだろう」

平次の問は第二段に進みました。

「両国ですよ、間違いはありません。擬宝珠ぎぼうしの形で解りませう」

「なるほど、両国かも知れない。——あの辺には見世物と水茶屋ばかりだが、道具屋のあのを知ってるかい」

「知りませんよ」

「実はな、八、この手拭の染め模様が何かの符牒ふちように違いないと思つて、俺は五日考えたよ」

「へエ——」

平次の根こんの強さに、ガラツ八は洒落も出ません。

「お前は十二支と江戸名所だと言つたが、どうも、そうらしくもねえ。いろいろ考えた末、思い付いたのは、南部の盲曆めくらごよみだ」

「……………」

「奥州おうしゅうの南部には、字の読めない者に読ませるように、——絵で画かいた曆がある。——

——禿頭はげあたまに濁りを打つて半夏はんげと読ませる——と言つたような話を思い出して、俺はさつ

そく麻布あさぶの南部様御屋敷へ出かけたのさ」

「へエ、——曆はありましたか」

「あつたよ、御用人にお願いするまでもないや、馬丁べつとうに知ってるのがあるから頼んで一枚貰つて来た、これだ」

平次は半紙一枚に刷つた、粗末な木版の盲暦を出して、見せました。刀の大小を並べたり、賽の目や、太鼓や、田植え笠や、塔や、いろいろのものを画いて、庚申こうしんは何月何日しやにち、社日しゃにちは何時いつ、彼岸は何日と判じて読ませるのです。

「これで見ると、十日と読ませるには、塔の蚊を画いている手拭の模様の最初のがそれだ。手前てめえは観音様の五重塔と鳶とびだと言つたが、あれは蚊だったよ、八」

「なるほどね、道理で無闇に足が長いと思つた」

「手拭の模様は十二に分けてあつたから、最初は正月とみていい、正月の十日という今日だ」

「……………」

妙な緊張に、ガラツ八は唇を嘗なめました。

「両国橋の近くに、何かあるに違いない、——どうだ八、この絵解えときは面白かろう」  
平次はこんな事を言つて落着いていいるのです。

「それじゃ行きましょう、親分、十日の日もあと一刻いっときで暮れますぜ」

「その暮れるのを待つているんだ」

「風をくらつて逃げたら？」

「大丈夫。お品さんが、利助兄哥あにきの子分衆に言い付けて、両国の橋の見えるところで、二階正面の障子が一枚、裏返しになっている家を、朝っから見張っているはずだ」

「へエ——」

ガラツ八は喫驚びつくりしました。五日籠っていた平次の神算鬼謀しんさんきぼうが、日本中の大泥棒の巢を、叩き潰すまでに運んでいたのです。

\*

その晩、両国の料理屋、鶴喜つるきの離屋はなれを借りて、年に一度の参会を開いていた道具屋の一隊は、石原の利助の子分を先鋒とする、八丁堀の組子とえはたえに十重二十重とえはたえに取囲まれ、多勢の怪我人まで拵こしらえて、尽く召捕りこしらになりました。その中には東海道荒しの偽虚無僧二人、木曾荒しの女泥棒、その他五街道の悪者ほとんど全部、十五六人にもなりましたが、江戸の老賊、『暗がりの総七』だけはいなかったということなのです。

銭形の平次は、しかし、これを自分の手柄にはしませんでした。

「輪飾りが裏返しになっていたのを見ただけさ、いやはや」

そう言つて首筋を搔く平次だったのです。



# 青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（一）平次屠蘇機嫌」鳴中文庫、鳴中書店

2004（平成16）年5月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第一巻」中央公論社

1938（昭和13）年11月1日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1938（昭和13）年1月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2018年11月24日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銭形平次捕物控

平次屠蘇機嫌

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>